

作文における構想の指導について

——論理的な文章のばあい——

菅野良三

一 はじめに

作文指導にかける時間は高等学校のばあい読解指導にほとんどの時間を奪われて、また事後処理の時間的制約にしばられてとかく削減されがちである。感想文にしる、論説文にしるなるほど生徒一人一人の思考なり感情なり心境などは表現の底に汲み取れる。しかし、主題の把え方・構想・表現などの面から、より効果的に、より論理的に書かれているかを分析してみても、指導の手ばかりを痛感せざるをえない。

主題を暖め、構想を練り、表現の工夫をするという事前指導は皆無に等しい状態であった。せいぜい一週間前に予告する程度であった。事後の処理は主として表現面の添削（誤字・用語・文体などの訂正・補足）に終わり、指導も全体指導によるきわめて簡単なもので、個別指導もほとんど実施していない。

作文を書くことによって生徒の内面的なものは把握できる。しか

し作文はそれだけがすべてではない。たとえば論理的な文章を書くばあい、書くことによって論理的な思考力を養い、思考することによって書く力を高めるということ、これは生徒は無意識の中に実践していると思われるが、指導とは自覚させ意識的に体得させることである。

このような反省に基づいて36年11月に実践したのが、論理的な文章を書くばあいの「構想」の指導で、特に事前指導に重点をおいた実践である。

二 構想指導の実際

今回の作文は教材の読解作業（単元「人生論」教材「幸福について」の読解作業）と関連させ、その発展として計画したものである。

指導対象学年…普通科二年生

作文題目……「幸福のあり方について」

(1) 指導目標

(A) 読解における目標（作文との関連事項のみ）

(i) 筆者の考え方を理解するとともに人生についての考えを深める。

(ii) 論理的な文章の組み立てや特色を理解して表現に役立てる。

(B) 作文の目標

(i) 幸福のあり方について自分の体験をもとにして考える。

(ii) (A) (i) の展開として、作文題目の主題につながるもの

(iii) 構成・表現などの力を養う。

(a) 事実と意見を区別して書く。

(b) 主題が明確にあらわれるように構成を工夫する。

論理的な文章を書くばあい、構想をたて、主題との関連を考えて書く意識を持った生徒は比較的少ない。大多数の生徒の書くものは、思いつきで、整理・熟考されていない論理である。たとえ家庭作業のばあいでも。

論説文などの読解は筆者の論の進め方・考え方などの点でかなり掘り下げ、深めて学習活動をすることが可能である。しかし、作文においては思考の主体が生徒自体であり、しかもそれは形としてあらわれないばあいが多い。生徒各自が考えを論理的に表現するよう指導することはなかなか困難であるし、その確かめも容易ではない。繰り返して、数多く書かせることができれば申しぶんないが、それも現段階ではできかねる。書き終えて提出した作文をもとにしての指導でなく、文章にする以前の、構想をたてる段階での指導が

必要である。この考えに基づいて前記の目標をたて、この目標を達成するために作文メモによる指導を計画した。

△資料ⅠV
(2) 指導計画及び指導の過程

週	読解	作文指導計画	指導過程
1	導入 (1)	○ 作文を書くことを徹底させる	① 題目について ② 主題について ③ 「作文メモ」の作成について
2	展開 (4)	○ 「作文メモ」の用紙配布 ○ 諸資料プリント配布	④ 作成上の注意 ⑤ プリントをもとにして説明
3	まとめ (1)	作文メモ提出期間 作文メモを生徒に返す	⑥ 「作文メモ」の訂正・補足 個人指導
4		「作文メモ」をもとにして作文を書く	⑦ もう一度全般的に注意する。

読解作業と関連させながら△資料ⅠVのような指導計画をたて、これに基づいて構想指導の実践を試みた。以下指導の過程を中心に述べることにする。

(4) 作文メモの形式

作文メモを作成しそれをもとに構想を考へることをねらいとしてこの形式を採用した。あらかじめ教師の方で項目をたて、生徒はその項目にそつて主題と関連させながら材料を配列するようにさせた。△資料2Vがそれである。

△資料2V

作文メモ	「」組 「」番 氏名
題目「幸福のあり方」について	
主題「	」
1 具体例(自分の体験したもの)	
2 自分の考え	
3 引用するもの	
(イ)(教科書)筆者の考え (ロ)説んだり、きいたりしたもの	
構成(例)	生徒の構成
一 3 (ロ)	
二 1	
三 2・3 (イ)	

(西洋紙12大)

(ロ)メモ作成上の注意事項(全般的なもの)

この種の文章はとかく抽象的・空論的なものになり、現実から遊離したものになりがちである。指導の目標を達成するためにも、現実の自分の生活を反省しながら、そこから「幸福のあり方」についてどう考へているかを論じさせるのがねらいである。必ず具体例は入れる。

△資料2Vの「3引用するもの」に関してはその必要のないものは省略してよい。

「主題」の決定については、現在自分が「幸福のあり方」について「こう考へる」「こうあるべきだ」というものを取り上げ、一文にまとめるようにする。

△資料2Vの「2自分の考え」の項は「主題」とも関連しており、あくまで「1具体例」をふまえたものであることを強調する。

字数の制限(800〜1000字)があるので、あまり欲張らないで最も主題と関連の深い材料だけをとりあげる。

メモであるので最大限「文」の形でとどめ、二文以上にはしないこと。できるだけ書く内容を項目の形に集約する。

「構成」に関しては、この「作文メモ」作成の主目標であるため、約一時間ばかりを費して注意する。まず△資料2Vの後部上段に構成の例を示し、その下段に生徒の構成を記入させる。(例にある一・二・三の数字は、段落としてのまとまりをしめし、その下の1とか3ロとかは「メモ」の具体例の項目、引用するものの「ロ」の項目をあらわすものである。)

そのばあい、最も力点を置く段落には、その数字の上に○をつけさせる。(これは主題と構想との関係をさぐる上での資料となるの

わ。）

なお、この「作文メモ」作成の補助資料としては大体次のものをプリントにして生徒に配布した。

○「幸福」についての諸家の文章・文を抜萃したもの。

○「あらずじ」の作り方（平井昌夫「わかりやすい文章」の書き方）より

○「アウトライン」の作成（森岡健二「コンポジション」）

○段落の組み立て（平井昌夫「わかりやすい文章の書き方」より）

○「文章の書き出しと結び」の型及び実例

（実例は新聞・雑誌・教科書などより抜萃）

以上の注意事項及び資料をもとに約一時間半にわたって事前に注意・指導を加え、実際の作文メモ作成は家庭学習の形にした。

その余の指導は人資料ⅠⅤの計画にもとづいて進めていった。

④指導の実態

「作文メモ」提出縮切りから生徒へメモを返すまでの期間は大体二日間。その間、主題・素材・構成相互の関連を中心に補足・修正を朱記し、本人の意見は放課後を利用してき、それに基づいて指導を加えた。

(a) 主題に関するもの

主題の決定は、教材の読解作業のとき、話し合ったり、筆者の考えをまとめたりしているので、比較的順調に決めていたようである。したがって主題そのものに関しては格別指導はしない。

主題の傾向として最も顕著なのは、

「幸福とは……努力……である」

といったので全体の約六割を占めており、二名ではあるが、特異な

ものとして

「他人が幸福になることによって自分が幸福になる」
があげられる。

(b) 材料の選択

大体において欲張っている。これは字数制限の面から適宜削除する。

また具体例があまりかけず、主題とも結びついていないのかわりに見受けられた。（特に中以下の生徒にこの傾向が強いのは、自己の現実をみつめる生活態度にも原因があると思われる。）あくまで現在の自分の生活を反省して、そこから例をとらえるように注意する。

(c) 「メモ」はかなりできてきているようであったが、まだ項目形式がとれず、余白一面に書きつけた生徒もかなりいた。しかし個別指導の際も項目形式を強制せず、書いていく上での論理の展開のめやすであることを理解させ「これとこれは残してあとは除いてよいところだ」という助言を与え、本人了承の上で改めさせた。

(d) 「構成」についても、メモだけをもとにして検討したばあい、

①無理に三段に分けたもの、②どこに力点があるか不明のもの、③あるいは一項目一段落の形をとったもの、など構想意識の低い者もかなり見受けられた。これらについては、それぞれ本人の意向をきいて助言、訂正を加えた。

指導の概要は以上の如くである。次に生徒の「作文メモ」を紹介する。（なお作文もあわせ紹介しておく。）

(1) 作文メモの例(1)

主題「幸福とは得ようと日々努力することの中にある」

1 具体例（自分の体験）

私の生活の反省

④現在の自分は幸福であるか

⑤不幸であるのか

2 自分の考え

④幸福とは努力そのものにある

⑤フォントネルの幸福についての考えに対する反論

a 消極的な願いではいけない

b 積極的な努力が大切である

3 引用するもの

④よんだり、きいたりしたものと

・フォントネル「幸福とはそのまま交わらないで続いてほしいような、そんな状態である」

構成

① 1

② 30・20

③ 21

(女生徒)

△本文V

(一)現在の自分は、幸福であるといえれば幸福であるし、不幸であるといえれば不幸であるともいえるだろう。両親の保護のもとに日々平穩

無事に過している現在、自分は幸福な状態にあるといえるだろう。が現在のこの平凡な日々甘んじて、もっと大きな幸福があるかも知れないのに、それを敢えてつかもうともしていない自分は、もしかしたら可哀そうにも不幸なのかも知れない。

(二)フォントネルは「幸福論」の中で「幸福とはそのまま交わらないで続いてほしいようなそんな状態である。」と言っている。何だかうしろから不幸が覗いてるみたいな言い方である。幸福という状態をこういうふうに言ってしまうのは、私としては厭である。外的にも内的にも満たされた状態の時、いくら喜ぶべき事や楽しい事があっても、それは当然のこととして何気なく見過されてしまうだろう。不幸があるから幸福をより意識するのである。満足しきってしまったら、またある状態を最高の点と決めてしまつたら向上などありはしない。明日に希望を抱き、向上しようと努力してこそ生き甲斐があると言ふものであるから。

(三)幸福へ近づこうとする努力それ自体、すでに幸福であると言えよう。明日に来るすばらしい幸福を夢見て努力する時こそ、真に幸福な時だと思う。楽しい事がある日を、あと何日あと何日と待ち望んでいる時が一番楽しいように。だから多くのしあわせが待ち構えているだろう未来に向かって生きている自分は、もう幸福の中にいるのだと言つてよいと思う。

(四)作文メモの例(2)

主題「幸福は努力の契ったときに存在する」

1 具体例

数学の難問の解決

2 自分の考え

①人により幸福の考え方・感じ方は違う

②精神面の幸福はどこにあるか

(1) 努力の過程

(2) 努力の果った時

③幸福は努力の大きさに比例する

3 引用するもの

現代存在するカミナリ族の考えている幸福感

①スリル

②創造する努力・喜びがない

全体の構成

一 3・2①

二 1・2③

三 2②

(女生徒)

△本文▽

(一)都会の路上を突っ走り、他人の迷惑を考えないようなカミナリ族は、どんな幸福を感じているだろうか。彼らはただスピードから来るスリルにのみ幸福を感じているのであって、創造する努力や喜びを持っていないようである。世の中にさまざまな人がいるように、幸福の考え方感じ方にも人によっていろいろと異なっているように思う。

(二)幸福は努力から生まれてくるのであって、努力なくして幸福は生じない。しかし、その努力に大小があると同じ様に、それに応じて幸福にも大小があるのではないだろうか。例えば、数学の問題を解く場合、それが努力せずとも容易に解ける時はさほどの幸福を感じない。しかし、努力に努力を重ね、考えに考えた末にやっと解けたような場合は前よりもずっと大きな幸福を感じる。こういうことから考えると、やはり幸福というものには、それまでの努力の大きさによってその度合いが違ってくるように思う。

(三)では精神面における幸福はどういう所に存在するのだろうか。「真の幸福は努力するところにある。」と言っている人もいる。しかし、私は努力する過程は勿論だが、むしろその努力が果って自分の目標が達せられた時、それまでの努力の過程を回想すると同時に、喜びと満足感を覚えるところに幸福は存在するのだと思う。

この二例は作文メモ作成のばあいほとんど教師が手を加える必要のなかったものである。

しかしこの例などは特殊なもので、大多数は相当の指導を要するのである。

三 反省及び問題点

構想指導といっても実はいろいろの問題を含んでいる。作文それ

自体

(1) 主題

(四) 素材の選択

(イ) 段落の組み立て

(ロ) 書き出しと結び

(ハ) 叙述

構想

のそれぞれが関連しあい、有機的に融け合っているもので、その一つ一つを切り離して考えることは困難である。構想は主題の深化・展開の骨格である。それをさらに肉づけするのが叙述である。しかも何もかも同じ比重で実践することはむずかしい。とすればどこで重点的に取り上げて指導しなくてはならない。特に取り上げるということは、他を軽視するというではない。

さて構想指導を終えて、メモをもとに作文したものとを照らし合わせてみて、反省し気づいたこと、あるいは問題点を次に述べることにする。

(イ) 「作文メモ」を作成し、それをもとにして書いたばあいとメモなしのばあいの相違

(a) 書きはじめる時間

メモをもとにしたばあいは、すぐ書く作業にとりかゝるが、メモがないばあいは書きはじめるまでに平均七―八分、長いものでは二十分以上たっても書けないでいる者もいる。

但しメモがあつても書き出しで悩む者も若干みうけられる。

(b) 構成

メモによるばあいは、前もって論の展開について考えているのでスムーズに書き進めている。ないばあいは、書いてはしばらく考えろということが繰り返され、時間もかゝり、その上論

理の展開が一貫せず、具体例と主題との結びつきも弱く、抽象的になりやすい。またしばしば、そのようなばあいは段落を設けないで書き通すといった、段落意識の働いていないものが多い。

ただし、メモ作成の段階で充分考ええず、整理されていないばあいは、途中で構成を変えたり、思いつきに流れたりして、論理の展開が不明になったり、段落相互の結びつきがバラバラで一貫性に欠けている。

(ロ) 個人指導と全体指導

全体的な一括指導だけに止めたばあいと更に個人的な指導にまで及んだばあいとは、改めて言うまでもなく、後者の方が、構想意識も高まるし、欠点にも気づき、書く意欲も違ってくる。

ただし、これには時間的制約もあり、全生徒というわけにいかない。ピック・アップしてもまだ、時間不足となる。これを解消するには、一つのテーマをクラス全体で討議しながら構想を考へるということも行なわれてよいのではないか。しかしこのばあい没個性的・類型的なものになる恐れがある。

(ハ) 「作文メモ」化について

メモを作り、それに基づいて文章を書くという作業で、生徒の中には、メモを作るのは何か余計なことのように考えて消極的な態度で臨む者もかなり見受けられた。(学力中以下、国語の嫌いな生徒が顕著であった。)

しかし、級友の「作文メモ」やメモをもとにした本文の発表をきいて、「メモ」化の重要性を認識したようである。しかし、指導の必要は今後に残されている。初めての試みであつたので、生

徒もとまどつたものと思う。

四 あとがき

生徒の構想意識はまだく低い。ほとんどはその場その場の思いつきによって書きながっているといつてよい。これは教師の責任でもある。思いつきによって書かされる生徒こそたいへんな迷惑である。

しっかりした指導体系をうちたてることを目標に、今後さらに時間的制約を越えて、あらゆる機会をとらえて実践していきたい。

(昭・37・11脱稿)

(広島県尾道東高等学校教諭)